

千里は遙かなり といえども……

法学部長 辻 秀典



卒業おめでとう。

「冗談じゃない、もっと学生をやっていたいですよ」というのが、君たちのおかたの偽らざる気持ちかも知れない。世間は不景気で、リストラの嵐が吹き荒れているから、君たちがそんな思いを持つのもまた、やむをえない。しかし、賽は投げられた。前に進むしかない。怖じ気立つことは無用である。世に先達はあらまほしきもの、君たちの先輩は社会の第一線で立派に活躍している。自信を持っていい。とはいえ、世界は、君たちが鋭く感じとっているように、大きく変わりつつある。戦後五十年、世界の枠組みをつくってきた冷戦と高度成長は終わりを告げたのだから。これまでのやり方が通用しなくなっている。先輩の生き方をまねるだけではやっていけないこ

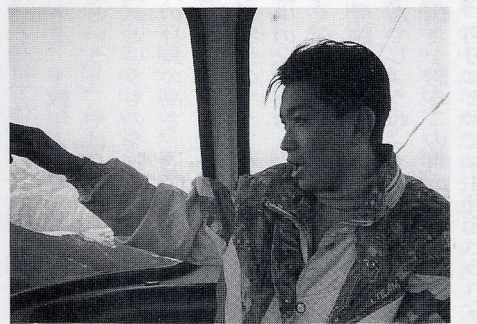
とも多かるう。しかし、めげるな。転んでも挫けず、また歩みはじめて欲しい。大事なことは、自分はこんなものと簡単に見切りをつけないこと。「人間について何ひとつ確かなことは無いのだ」(ソポクレス)。よい旅を。

何を学んだのだらう?

法学部 三宅 雄一郎

振り返れば、大学四年間は本当にあつという間であった。夢と希望、そして初めての一人暮らしの不安を抱え入学した私を、広大はいつも愛し、そして時に厳しさをもって見守ってくれた。ゼミでお世話になった高橋教授と、コーヒーを飲みながら法学や政治・経済に至るたくさんのテーマで話し込んだ教官室。友人の弾くギターで共に歌ったスペイン広場。初めてインターネットに触れ、個人のホームページまでつくった総合情報処理センター。キャンパスにはどこにも思い出がいっぱいである。

ゼミ旅行で行った大朝の温泉も面白かった。宴会で思いきり飲んでしまいい翌日のスキーができなかったD君は、付き合っている彼女の存在まで発覚してしまい大変だったが、それも今となっては楽しい思い出である。



瑞穂スキー場にて

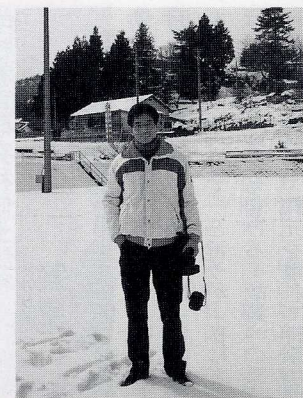
ところで、私は一体何を「学んだ」のだらう。ただ、一つの確信はある。この大学時代は、私にはなくてはならないものだった。

師恩忘れ難し

社会科学部 高 光義

私の留学生活は、あつという間に六年が過ぎ去った。日本に来たばかりの頃、異文化に生まれて初めて触れる私は、食生活になかなか馴染めなかったり、人間関係や勉強の苦しさ、挫折などを経験したが、今、これらのことを思い返すと、まるで他人事のように思えて、広島で暮らした日々の手応えを感じる。

指導教官の阪本昌成先生は、広島大学の教授陣の中でも、学問に対する厳



一面の銀世界—常夏出身者の憧れ

しき、学生に対する要求の高さで有名である。途中で履修を断念する学生は少なくない、という噂が法学部内には流れているようである。先生から単位をもらった学生は、自分をほめて良いと思う。先生はいつも大学の研究室にいて、学生の疑問にすぐに答えてくれる。先生は、大学教授の責務は、学生の指導と、自分の学問研究が主なことだと考え、学生が教師を必要とするとき、すぐに教師を見つけてくれることができなければならないという信条をお持ちになっている。このような素晴らしい先生に出会えた私は、本当に幸運である。この短いようで長かった六年間に、先生は多くのことを教えてくださった。しかし私は何らお返しもできず、恥ずかしい気がする。先生の学恩に報いることは本当に難しいと思う。

最後に、外国人である私にも寛容な心をもって、厳しくも暖かみのある指導をしてくださった阪本先生に心から感謝申し上げます。

転換期への船出

経済学部長 前川 功一



諸君、卒業おめでとう。小学校から大学までの長い教育課程を無事に終え、ここに卒業を迎えられたことに對して、おめでとうと拍手を送り心から諸君の前途を祝福したい。

しかし、諸君がこれから船出しようとしている現在の日本経済は、長く深い混乱の中にある。その原因や対策はいろいろであるが、歴史的に見れば、日本は「欧米へのキャッチ・アップ」を成し遂げた後の、長く苦しい転換期にあるといえよう。どこに向かうかさえ識者の見解は一致していない。

だが、明治維新や戦後の日本経済の復興などの歴史が教えるように、転換期には若い活力が必要とされる。したがって、諸君を待ち受ける社会は、見方を変えれば、今、若い諸君を必要としているということでもある。そういう意味ではあまり悲観的になる必要はない。むしろやりがいのある時代だと、積極的に捉えよう。順調だったころの日本経済を知らない諸君は、比較すべ

き過去をもたないが故に、自由に発想することもできる。

昨今の日本経済は、「欧米へのキャッチ・アップ」の時のような明確な目標やシナリオをもたない。このような海図のない時代にあつては、与えられた仕事を、慣例に従って一直線に邁進するエリート集団は、えてして過ちを犯しやすい。そして、組織が大きいほどその過ちの社会的弊害も大きい。

諸君も、社会に出てからは組織の枠に縛られることなく自由な発想をもち、時には自らの行動を振り返る余裕をもつてほしい。また、生きた経済の勉強を続けることにより、激動する経済に対する洞察力を養って欲しい。これからは、諸君が二十一世紀の日本経済を切り開いていく番である。

感謝

経済学部 滝本 勇紀



1996年10月4日

この五年の間、私を助けてくれた人々に、今ここで、感謝の念を表すとともに、この先、感謝の心を持ちつつ生きていく誓いを立てさせていただきたい。

私の二年間

社会科学部 大井 里佳

二年前の冬、進学を希望していた私は、「飛び級」に挑戦してみようと大学の試験を受けた。キャンパスも移転



研究室風景(本人中央)

し、新しい環境とともに大学院生活が始まった。

大学院では、留学生や社会人など歴史がさまざまな院生と知り合うことができ、研究テーマも多様であることから、日々刺激を受けた。また、修士論文の作成をとおして、多くのことを学び研究の厳しさも味わった。ティーチング・アシスタントとして教壇に立つという貴重な経験をすることもできた。振り返ると、研究の合間や時には通学途中の電車の中で、多くのことを先生方や院生と語り合えたことは、何物にも代えがたい思い出である。教えられたこと、励まされていたことを胸に、さらに進んで研究を続けていきたいと思っている。